

ア・ジップヘーゲン収容所に収容

(岩手県 田辺 壮久)

され強制労働に従事

同 二十三年六月、ナホトカ労働
大隊

終戦とシベリア抑留記

同 二十三年七月、ナホトカ出
港、帰国

栃木県 天野 喜一

帰国後の職歴

昭和二十三年七月、建設業自営。
その後、大船渡職業訓練協会長。

現役入隊と軍隊生活

敗色日々に濃くなる昭和十九(一九四四)年十

岩手県技能士会大船渡地区技能士
会長

現住所 岩手県大船渡市大船渡町字明神前

一月二十日、青春二十歳の現役兵の一員として徴
集となった。軍都宇都宮東部三十六部隊に入隊

し、直ちに軍服の支給を受けた。襟に一つ星の陸

歩兵九十連隊とソ連軍との参戦者、満州九十連隊

軍二等兵に着替え、格好は兵隊となった。私物を

アルシャン会戦友会幹部として、特に九十連隊長

ととなった。

以下、部隊主力の収容所ジップヘーゲン収容の

その後、営内において嚴重な身体検査と予防注

ジップヘーゲン副会長として現在活動している。

射が行われ、一週間後の十一月二十六日、私達千

なお、盛岡市において毎年十月開催されている

人の出征部隊が威風堂々、歩調をとって衛門を出

シベリア抑留岩手県関係死者慰霊祭に、戦友、

て行進を始めると、見送りの親兄弟は一緒に歩き

遺族の参加のため尽力している。

出し、我が子を真剣な眼で探す姿が見受けられ、

肉親との絆の深さを心から痛感した。

軍隊が戦地に赴くときは、新品の軍衣、小銃には白い布を巻いて出征する姿を見た記憶はあるが、私達は中古の軍衣に、小銃は支給されず、竹製の水筒に地下足袋のお粗末な姿であった。

しかし、軍装備は淋しかったが、宇都宮駅までの約四キロメートルの沿道は「万歳、万歳」の旗の波。電機店ではスピーカーのポリウムをいっぱい以上に上げ「出征兵士を送る歌」を響かせていた。

我が大君に召されたる

命栄えある朝ぼらけ

讃えて送る一億の

歓呼は高く天を衝く

いざ征けつわもの 日本男児

昨日まで出征兵士を送ったのは数知れず、しかし今は私達自身が歓呼の声に送られて出発するの

であり、見送りは盛大で、このような大勢の人々に送られて宇都宮から部隊が出発できたのは、私達初年兵が最後であったと思われる。

盛大な歓呼の声に送られても、その声は、時勢とはいえ、死地に赴く我が子に向かつて心から「万歳、万歳」と言えた親兄弟が何人いたことであらうか！

出征兵士を乗せた列車が動き始めると、見送りの人達が両手を挙げて「万歳、万歳」と叫び、私達は列車の窓から鈴なりになって顔を出し手を振る。思えば、行く先も帰る日も知らされず、その上生死の保証もないので、親兄弟の心境を察するに余りあった。

郷土宇都宮を後に列車は汽笛一声、故郷の山河に別れを告げ、下関より関釜連絡船に乗船し、直ちに救命胴衣の装着が命ぜられ、連絡船は静かに航行を始める。対馬海峡の中間地点と思われるあたりで突然時化に遭遇、大揺れを感じたが、その後静けさを取り戻し無事に釜山に入港することが

でき、安堵感を味わった。

釜山より大陸広軌鉄道の列車に再び乗車し、京城（現ソウル）→平壤（現ピョンヤン）→朝鮮最終駅、新義州（現シニジュ）を経て旧満州国の奉天（現瀋陽）→大虎山（ターフーシヤン）→錦州（チンチョウ）→中国の山海関にて武装の警備兵が同乗し、改めて戦場であることを感じ、北京を経由して保定（バオチン）に到着した。

保定は日支事変当時、宇都宮第一四師団攻略の地であり、新聞や写真でしか見ることもなかった城壁の高さに、郷土部隊の激戦と武勲が偲ばれた。

翌朝、保定を出発して、入隊する独立歩兵第七八大隊の所在地、高陽へと向かった。初めて行軍する北支の広野は寒気鋭く、護衛する部隊先輩の熱意に感謝しながら十二月四日、途中何事もなく行程八日間の旅にて無事河北省の高陽に到着し、直ちに機関銃中隊宿舎に案内された。

教官より「お前達は本日より歩兵の花形である

機関銃中隊に選ばれたのである。その名誉のため恥ずかしくない立派な軍人になるよう訓練に邁進されたい」との訓示があったことを記憶している。

初年兵教育の開始

機関銃中隊に配属された初年兵は五十人、教育隊第一班、第二班にそれぞれ二十五人配属され、教育班長、助教が紹介された。

早速官給品の支給であり、鉄帽・背囊・水筒・天幕・手榴弾・三角巾・正露丸・襦袢・袴下などが各自に支給され、それぞれ氏名を注記するのに手間取った。

内務の生活は六時の起床ラッパから始まり、内務班内の清掃・営内の清掃・洗濯・飯上げ・銃剣の手入れ・重機関銃の手入れ・馬の手入れなど、班内全員が分担して実施するのである。

翌日より早速初年兵教育の開始である。軍人勅諭、戦陣訓、重機関銃の性能や各部の名称等、矢

継ぎ早の詰め込み教育であつて、教官の訓示にあつた「重機関銃隊は歩兵の花形」であるための訓練も厳しく、戦闘において戦果の拡大も大きく、反面、敵軍から狙われやすく犠牲者も多いと感じられた。

朝夕に唱和した軍人勅諭及び戦陣訓は、軍人としての精神的な必須の基本条件であり、戦陣訓の書き出しは「夫れ戦陣は、大命に基き、皇軍の神髓を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御稜威の尊厳を感銘しむる処なり」と書かれ、今の若者が読んだら理解に苦しむ文章であろうが、当時の兵士全員は真剣そのものであつた。

軍隊の初年兵教育は、短期間に立派な軍人を育てることが肝要であり、肉体的に軍隊に適應する体力と、強固な軍人精神を堅持することを涵養せしめることが目的であり、教官・班長・助教の厳しい指導を理解することができる。寒風の中三カ月間の初年兵教育も無事終了し、部隊長の検閲後

に中隊復帰となつた。

関東軍へ転出

昭和二十年五月、欧州戦線においてドイツ軍は連合国軍に対し無条件降伏を余儀なくされ、ヤルタ会谈の密約により、ソ連の欧州軍は急遽シベリア、沿海州に軍を進め対日参戦の準備を進めていた。

世界に誇る満州の精銳関東軍も昭和十八年十一月以降、兵力の抽出が相次ぎ、昭和二十年春には二十四個師団のうち二十一個師団は十九年六月以降の新編成による師団であり、末期には「根こそぎ動員」を実施して一種の人海戦術を企てたが、その実態は急造された兵団の集まりであり、兵役経験不足と装備劣悪な関東軍となり、とうていソ連極東軍と互角に戦える軍隊ではなかつた。

諜報力の最も優れたソ連最高機関がこの事実を見逃すはずはなく、日ソ中立条約を結んでいる友邦の間柄を無視し、十九年十一月のスターリン演

説は公然と日本を非難し、翌二十年四月にはソ中立条約の一方的破棄を通告してきた。

硫黄島の日本軍は玉砕し、沖縄はアメリカ軍の手中に帰し、連合艦隊は既になく、首都東京は廃墟と化し、アメリカ軍の本土上陸は最早時間の問題であり、ソ連軍の侵攻も火を見るより明らかになった。

昭和十六年の関特演における関東軍は二十個師団約七十万人の兵力を誇っていたが、昭和十九年以降は櫛の歯を抜くように南方戦線に転出された。

昭和二十年六月、師団命令により我が七十八大隊は高陽警備隊を撤収して保定に向かった。翌朝、貨物列車に乗車し扉は閉じられ、行く先も知れず貨車は北に向かい進行中であつた。六月中旬、貨物列車は満州国の興安西省銭家店に滑り込んだ。

関東軍の一員となつた以上、対戦相手はソ連軍

であり、酷暑の中で厳しい戦闘訓練が朝から夜の遅くまで毎日断続的に続けられた。

訓練の内容は対戦車肉弾攻撃であり、爆薬を抱えあるいは背負い、敵の戦車に体当たりする歩兵の肉弾特別攻撃であり、戦車を破壊すると同時に己も玉砕する特別攻撃の作戦であつた。訓練日の初日夕食後と記憶しているが、突然呼び出され上官より、「ソ連軍が参戦すれば、お前達の命は俺が預かる」と強い口調で伝達され、便箋大の用紙が配付され、親兄弟に対する最後の手紙を書くようにとの指示があつた。

当時何を書いたか、既に五十余年前のことであり明確ではないが、以下のようなことを書いたと思われる。

「母上様、二十有余年の間、種々お世話になりました。風雲国家存亡の時であり、大和魂を代表する肉弾特別攻撃の一員として国家のため死することは最大の親孝行であり、国家に対する最後のご奉公を致す覚悟であります。別れるに当たり、

どうか長生きされ、私の遺骨は母の胸に抱かれて無言の凱旋をすることが私の念願であります。決して生きて還るといふ様なことは思っておりません。親戚・隣組・会社関係の皆様宜しくお伝え願います。さらば。健康を祈ります」

以上のような遺言を書いた記憶がある。

戦後、戦友会において、対戦車肉弾攻撃に参加された戦友から当時の戦闘状況を聞いたところ、ソ連軍参戦当時に大量の戦車部隊に遭遇し、不意をついた肉弾攻撃により敵戦車部隊に多大の損害を与える戦果を挙げたとのことである。

その後、ソ連軍は日本の肉弾特別攻撃に対し、戦車よりの火炎放射器による反撃に転じ、日本軍は多大の犠牲者が続出した。

今、当時のことを思い起こすと、終戦がもう少し遅れていれば私はこの世に存在していなかったことを深く痛感している次第である。

戦わずして敗る

この頃（昭和二十年七月初旬と記憶）、日本軍の敗戦を予測した華北の八路軍（現中国人民解放軍）は、万里の長城を越え大挙して満州の熱河省へ侵攻を開始して来た。

部隊は大興安嶺の溪谷に向かい行軍を開始し、この付近の山岳に樹木はなく、行動は山また山で、約千余人の部隊が行動したのでは八路軍の抵抗は皆無の状態にて、捕捉できるはずがないと思った。

推測であるが、対ソ戦を意識して兵力の損耗を避け兵員の悠々英気を養うなど、長期にわたる陣中のどかな討伐作戦であり、部隊長の親心であったと想像される。

昭和二十年八月九日、長崎に原子爆弾が投下された日であるが、それとも知らず万里の長城付近を行動中に、ソ連軍の日本に対する宣戦布告の情報に接し、現在、ソ満国境において交戦中とのことであった。

我が部隊は討伐行動を即刻中断し、熱河省の承德を經由して錦州省錦州へ移動を開始した。予想していた通りソ連軍との戦闘開始が到来したのであり、我が部隊はソ連軍と対戦のため陣地構築を開始し、八月十五日も午前中から引続き構築作業が続行中であつた。午後二時頃と記憶しているが、熱河省は大陸特有の真夏の暑い日であり、突然、作業を中止して広場に集合せよとの指示であつた。

部隊長が壇上より「これから命令を伝達する。天皇陛下より大詔が発せられ、日本帝国は無条件降伏により今後一切の戦闘行為を中止する」との極めて短い命令であり、後段に「兵士諸君は本日まで私の指示に従い献身的に忠誠を尽くしたが、今後は祖国帰還までは健康に留意し、帰還後は祖国再建に努力願いたい」との指示であつた。

兵士一同は啞然として半信半疑の状態に陥り、戦争が終了して祖国に帰還できる喜びと、戦争の賠償として労働に従事するとの不安が併存してい

た。

昭和二十年八月二十日、我が部隊は師団命令により、錦県地区内の治安維持と警備に任ずることになり、在留邦人の保護と市内治安の任務に就いた。市内では、以前日の丸の旗で我々を歓迎してくれた満人達は、即座に中国の国旗に切りかえ、市内各所を日本兵士や中国軍内の毛沢東の共産軍兵士及び蒋介石の国民軍兵士が巡回し、複雑な様相を呈していたが、お互いに会話を交わすなど、緊張感は感じられなかつた。

武装解除

昭和二十年八月三十一日、ソ連軍の戦車、兵員を満載した自動車が続々と錦県地区に進駐し、中国駐留以来磨き抜いた一切の武器弾薬を返上し、屈辱たる武装解除を余儀なくされ、旧日本軍錦県貨物廠に収容された。貨物廠内には膨大な物資が格納され、倉庫内はもちろんのこと、屋外にも山と積まれた物資が保管されていた。廠内の物資を

ソ連国内へ輸送するための積み込み運搬作業は全て日本兵士が従事した。倉庫内には食料・嗜好品・衣類・日用品など豊富に保管され、今までに見たことのない航空食料品などを味わうことができ、幸いであつた。

ソ連軍将校からの連絡によると、「ヤポンスキー・スコーラ・ダモイ・ハラシヨール（日本兵士の早い帰国おめでとう）。日本は戦いに敗れ国内では物資不足のため、防寒具や日用品類は多量に確保すること」との指示があつた。また帰国に際し、戦闘による鉄道の破壊箇所もあるので、工事情材の準備をすることも追加された。

約一週間にわたる物資の積み込み作業も完了し錦県飛行場に集結し、帰国に伴う新たな部隊編成が実施された。

北上する鈍行貨物列車

祖国日本に帰還することをソ連軍より指示され、「ヤポンスキー・ダモイ・ハラシヨール（日本

へ帰国、おめでとう）」と言つてくれるので、内心帰国の喜びを感じていた。

膨大な人員を一カ所の港より帰国させることは混雑を招くとの観点から、一般邦人は朝鮮の釜山港より、軍人はソ連のウラジオストク港より帰国することと、正に当を得た話であつた。

当時の帰国について話題を総合すると、戦争が終結して「帰国できる喜び」の楽観論と、戦争の代償としてソ連に抑留され「強制労働に従事する」の悲観論に集約され、総合的に判断すると後者が強く、不安も込み上げ、兵士の表情も暗く感じられた。

昭和二十年十月七日、噂が実現しいよいよ出発日の到来であり、部隊長の訓示は「残念ながら屈辱の武装解除を受けたが、祖国日本には親兄弟が諸君達の帰国を待っている。体には十分注意して帰国後の国家再建に尽力願いたい」の最後の訓示があつた。

帰国用貨物列車の車中は、左右二段に板で仕切

られ、上段四隅に鉄格子付きの小窓があり、上段左右に四十人、下段左右に四十人の計八十人が、小窓の鉄扉から漏れる薄明かりの中、穴蔵のような薄暗い車内に寿司詰めの状態に収容され、寝具類の支給は一切なく、立ち上がると頭がつかえ身動きのできない窮屈な車内で寝ている状態であった。

スキのなびく秋も深まる錦州駅を帰国列車は静かに滑り出し、帰国第一歩の開始であり、列車は順調に北上を続け、奉天・四平・新京、満州の中間地点ハルピンまでの五日間は比較的順調な走行であった。ハルピンを出発して四、五時間走り続けると、貨車は止まっては走り、カタツムリの走行運転となった。

十月十五日、綏化に到着した模様で、大地は黄色一色にかえられ、畑の高梁は総て刈り取られ、雪でも降りそうなうそ寒い空模様となり、一週間程度停車の見込みであるとの情報であった。

逃亡者が発生したため本日より車内の小窓は遮

蔽され、貨車の扉は表から鍵が掛けられ、車内はさらに暗く空気の濁りを感じ、兵士一同、相当の疲れが見え始めた。

排便は一日一回、貨車の扉が開放され兵士一同は下車して、鉄道線路両側における一斉排便であり、先発隊の残した排便の痕跡が散乱し、ソ連警戒兵の「ベストラ・ベストラ」の怒号に追い立てられ、その姿は敗戦国の悲惨そのものの姿であった。

十一月七日、北安まで一カ月間を要し、四囲は一面銀世界に化し、この雪は来年まで消えないであらう！

十一月二十五日、走り続けた貨物列車は夕刻、満州の最終駅黒河に到着した。秋風を身に感じながら錦県を出発し、満州を一路北上して五十日間にわたる貨車生活の旅は終わり、既に酷寒零下三〇度の真冬の時期となっていた。

約二カ月の貨車生活は、シラミ・寒気・飢餓に加え、洗濯・入浴などすべてなく、栄養失調・チ

フス患者が続出し、犠牲者も多く、帰国を目前にして尊い命を失ったことは誠に残念の極みである。

貨車生活は人間として極限の生活であり、身は常に死影が寄り添い、忍耐の人生街道を歩む心境であり、現在、当時のことを思うと実によく耐えたものと思われる。

一望千里白雪の中に埋まっている黒河の街は、零下三〇度を超す厳寒であり、その晩は宿泊場所がないため、焚き火をしながらの野宿であった。もちろん眠ることはできず一睡もせず夜を明け、寒さ・疲労・空腹に耐え一晚の長さを痛感した。

満州国とロシアの国境を流れるアムール河（中国名黒龍江）は既に氷結し、氷上に枕木を並べ鉄道線路の敷設作業が行われていた。満州より没収した物資をソ連領内に輸送するための交通施設とされる。

凍結したアムール河の対岸にソ連領ブラゴエシ

チェンスクの街がよく見え、満州国より没収した膨大な物資が山と積まれ、厳寒の中、日本兵士が貨車に積み込み作業している状態がよく見えた。

シベリア抑留

これは「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ」というポツダム宣言に完全に違反するものであり、断じて許すことはできない。

しかし、敗戦の悲しい強制的連行が現実となり、抑留生活の第一歩となった。ソ連領と満州国の国境を流れるアムール河は既に氷結し、橇を使って携行した物資の輸送開始となった。

長期間の貨車生活と寒さと空腹が重なり、身体は疲労困憊に陥り、過酷な物資輸送も限界に達し、死の街道を歩く心境であった。

氷上輸送二日目と記憶しているが、他部隊の橇を引く兵士と出会い、橇に遺体と思われるものが

積載され、立ちどまり事情を聞いたところ、日本兵の遺体であり、火葬するには燃料がなく、埋葬するには酷寒零下三〇度を超す平原の掘削は困難であり、やむを得ずアムール河の水を掘削して河に流す水葬の作業ですとの話であった。

氏名・出身地・部隊名も判明せず、敗戦の悲惨な光景を目前にし、手を合わせご冥福を祈るばかりであり、敗戦の悲しさを痛感した次第である。

アムール河の氷上輸送も無事完了し、再びソ連製の貨車に詰め込まれ、進行方向は間違いなく西に向かい、帰国の願望の夢ははかなくも破れ、兵士全員の落胆は隠せず、背信行為に憤りを感じた。

約一週間のシベリア鉄道の旅も終わり、ケメルボ市郊外のクルトイ駅に到着した。

ソ連軍の将校を先頭に警備兵に前後左右を監視され、一時間後に白樺林を切り開いた場所に板塀の囲いが見え、アーチ型の衛門入り口には横文字にてロシア語の看板があり、我らが収容される収

容所であると思った。

衛門を入り休む間もなく中庭に整列して人員の点呼が始まった。警備兵の検問は表向きで、彼らに時計・万年筆・手袋など目ぼしいものが没収された。

その後宿舎に案内されたが、寝台には藁布団と毛布一枚が並べられただけで、その他の支給品はなく室内は閑散としていた。

抑留地の生活

収容所は高さ四メートルもある厚板塀で囲まれ、その内側と外側四メートルのところに、高さ一メートル程度の棒杭が一メートル間隔に立ち並び、有刺鉄線が三段に張り巡らされている。

敷地は約一万平方米（縦百メートル、横百メートル）、塀の四隅には高さ約六メートルの監視の望楼が設置され、自動小銃を持ったソ連監視兵が昼夜を問わず監視に当たっている。

出入り口は一カ所だけで、守衛所に監視兵が

四、五人配置され警戒は極めて厳重で、脱走者は見つければ即座に銃殺される。

収容所内には事務室・医務室・宿舍・炊事場・食堂・浴室・及び製パン工場も配置されている。

居住の宿舍は半地下方式で、窓は二重硝子窓にて開閉はできない（防寒対策のため）、両窓側に二段ベッド（蚕棚方式）があり、ペーチカ（暖房設備）は年間を通じて使用している。

朝六時の起床は、守衛所前に設置してある鉄道線路の切れ端（約五十センチ程度のもの）をハンマーで叩くのである。

朝起きて洗面する訳でなく、作業衣を身につけ食事当番の食料分配を待つだけである。各自が出した飯盒に食事当番は班員全員立ち会いのもとで均等に配分するが、一同の目は鋭く異様に光り、量が少ない、多いと飢餓状態から、自尊心や道義心、正常な常識すら失い、自己保存の本能のみが働くようになってしまう。

寒さに加え給与も非常に悪く、粟粥（朝夕各四

百グラム）、昼食はフレーブ（燕麥で作った黒パン）三百五十グラムが支給基準とされていたが、定量に満たなかったことは事実であった。

当地区は炭田地帯にもかかわらず私達の仕事は、建築（基礎の掘削、煉瓦積み）・製材工場・煉瓦工場・コルホーズ（集団農場における植え付け、収穫）・鉄道線路の敷設・水道管の埋設工事が主たる作業であった。

作業は旧軍隊の分隊方式に区分され、二十〜三十人単位の作業班に編成され、それぞれの異なった作業に従事していた。

ソ連憲法にある「働かざる者食うべからず」の鉄則に基づき、国民全部が労働しなければならぬという規則があり、それがソ連国民の姿であった。

朝、作業出発時は寒風針を刺すようで骨身に感じ、守衛所前にて人員の確認を実施する。監視兵は一人、二人と真剣に数えているが人員が合わぬいらしく、疑問を感じ、戦勝国兵士がこの程度の

知能なものには驚いた。人員の確認も終わり収容所を出て作業場に行くときは整列して歩く。前後に自動小銃を肩に掛けたソ連監視兵に警戒されながら雪の降り固まった道路を進む。川や畑も見境なく白一色で、一直線に進むのみである。人家は見当たらず人気もなく、帰国の望みも皆無であり、寒風は針を刺すように骨身に感じ、まるで死の世界を黙々と歩むのであった。

作業時における屋外の気温は氷点下三〇度前後であり、服装は作業服（日本製の軍服）に防寒外套・頭には防寒帽・足はカートンキ（フェルト製の防寒長靴）、手には軍手の上に毛の付いた大手袋にて二重に保護し、顔は種々の布で覆い目だけは出ているが、幾ら被服で包んだとしても、外気の寒さには対応できない状態であった。

寒風肌を刺す粉雪の舞う氷点下三〇度を超す屋外作業に、何の慰めもない心細い生活、空腹と疲労に襲われ明日の命も知れず、作業の中で吐く息はたちまちのうちに凍り、口は硬直し、睫毛は瞬

間的に上下が凍りつき、盲目同然のシベリアの嚴寒は筆舌に尽くし難い。体中が針にて刺されるような痛み（寒さ）を体験し、死んだ方が楽になれると思ったのが抑留者の偽らざる実感であろう。

寒さのため手や足の指先も感覚も失い、凍傷となり薄黒く変色し、徐々にローソクのように白くなり、切断しない限り他に影響があるので切断せざるを得なくなる状態に追い込まれる。

切断といっても医務室に麻酔薬はなく、戦友の二、三人が体の各部を押さえ、軍医が小型切断器にて指を切り落とし縫い合わせる。患者は体中脂汗を流し、歯を食い縛り手は強く握り締めている。その治療に立ち会ったが、痛いという表現より死の苦しみであり、悲惨そのものであった。

私達も多情多感な尊い青春を、零下三〇度以下にも下がる嚴寒の中、飢餓と過酷な強制労働のため体力も尽き果てて、次々とあたら尊い命を失った多くの戦友を忘れてはならない。その屍を十分に葬ることもできず、一個の物体としか扱われな

境遇に置かれた毎日であった。明日の自分の命がどうなるか分からず暗たんたる境遇の中で歯を食い縛り、一切れの黒パンで故郷の夢と親兄弟との再会に望みを繋ぎながら死を乗り越えてきた。

かつて戦地において生死を共にし、苦難を乗り越えてきた戦友と一緒にできなかったら、今ごろどうなっていたか分からない。恐らく生きて再び故国の土は踏めなかったであろう。

約三年間にわたる厳寒・飢餓・重労働の三重苦は、筆舌に絶する苦難の道を歩み、一生涯忘れることのできない苦しい体験であった。

ダモイ（帰国）

空を仰いで、この空の続く彼方に祖国日本があり、そこには私達の家族や親戚知人が帰国を待っている。戦後の日本はどうなっているのか皆目見当がつかず、童話に出てくる浦島太郎の心境であった。一日も早く家族に会いたい、甘い物を腹いっぱい食べたい、風呂に入りたい、畳の上で

布団に寝てみたい……次から次へと懐かしい思い出が走馬灯のように頭の中を回るのである。

同じ作業をしている現地人から、日本人を乗せた貨車が東に走る姿を見たので皆様はスコラ・ダモイ（近日中に帰国）だのデマ情報ももつともらしく出ているは、いつか消え、消えては再び出るのである。

ソ連領ナホトカ港を引揚げ開始の第一船として五千人の復員軍人を乗船させて出港した大久丸、恵山丸が、昭和二十一年十二月八日、舞鶴港に入港して以来、最終引揚船・興安丸（病院船）が昭和三十一年十二月二十六日入港するまで十年の長い歳月を費やした。

その間において昭和二十五年四月、ソ連当局は「ソ連地区からの送還は完了した」と発表し、留守家族をやきもきさせたが、昭和二十八年、引揚げは再開された。

昭和二十三年七月中旬、二十二時頃と記憶しているが、シベリア地区は白夜の時期で四囲はまだ

明るく、年間を通じて一番よい季節であり、屋外において戦友と雑談中に突然「明日の作業は中止であり、帰国の準備をされたし」との指示があり、夢にまで見、待ちに待った帰国が現実となり、瞬間は天にも昇る思いで、全員大声で力いっぱい叫び喜びを分かち合った。

帰国準備といつても着の身着のままの状態で特に準備するものはなく、私物の整理後に、「飛ぶ鳥後を濁さず」の格言に従い、喜びの余り一睡もせず収容所内の清掃に徹した。

翌朝広場に整列し、所長より「待ちに待った帰国が実現した。帰国後は健康に留意し祖国日本の復興に努力されたい」との指示があり、人員確認後は足取りも軽く、戦友の顔にも微笑が浮かび乗車駅に向かった。

約二週間の帰国貨車の旅は、入ソ当時の厳寒期と異なり、シベリア鉄道の沿線は四季の草花が一斉に咲き乱れ、我ら帰国兵士を歓迎してくれるように見え、抑留者帰国の砂浜地にあるナホトカ幕

舎収容所に無事到着した。

当収容所において最終的な身上の確認が行われ、アクチーブ（共産党指導者）による天皇島上陸のアジ教育も受け、帰国手続も順調に進み、昭和二十三年八月十日乗船となった。

収容所よりナホトカ港までは約五百メートルの距離があり、「赤旗の歌」を歌いながら歩く戦友の姿は何か異様な感じで、何とも無言の圧力を痛感した。

岸壁に横付けされていた貨物船に「遠州丸」の文字がはつきり見え、三年ぶりに見る懐かしい日章旗が掲げられ、準備万端にて私達の乗船を待ち受けていた。

ソ連側将校二人による再度の人員確認が行われ、タラップを上る足も軽い。船上には思いもかけず日本赤十字病院から看護婦さんや引揚援護局の職員多数がいて、その出迎えを受け、「長い間ご苦労さまでした」と声をかけてくれる。それを見た途端、照れ臭さと嬉しき、喜びが一緒に胸の

底から込み上げてきた。

係員より船倉に誘導され、宇都宮東部三六部隊に入隊以来四年ぶりに昼の懐かしい感触に接し、間もなく日本の煙草とキャラメルの支給があったと記憶している。

全員の乗船も完了してソ連側当局と日本援護局との引き継ぎも終了し、岸壁と復員船を結ぶタラップは切り離され、私達を乗船させた復員船遠州丸は静かに祖国日本に向かい、一メートル、二メートル、三メートルと出航し始めた。

心の中では帰国が現実となり安堵感を覚えたが、ナホトカ港を離れた瞬間、三年間の苦難に耐えたソ連の地を二度と再び踏むことはないと確信した。

復員兵を乗せた遠州丸は、エンジンの音も快調に日本海を祖国に向かい航行中であり、地図で見る日本海は小さいが、二泊三日の船上より見る日本海はさすがに広い。

遠州丸は十二ノット（時速二十二キロメートル

程度）の速度にて航行中と思われる。間もなく船内放送にて船長より、船は順調に舞鶴港に向かい航行中であり、皆様の帰国を待っている舞鶴港に入港するのは八月十二日午前十時の予定であるとの放送があり、復員兵はもう手を挙げて「万歳、万歳」の歓喜に溢れた。

穏やかな日本海を渡り乗船三日目の朝を迎え、船底に伝わる声は私達の仮寝の夢を破る大声で「おーい、日本が見えるぞー」に我先にと甲板に駆け上がった。

群がり集まって見つめる左舷水平線に霞を流したような一条の陸地が見えたが、進行方向からいつて能登半島ではないか！ 「あれが日本か」、甲板に鈴なりの復員兵を乗せた遠州丸のエンジンの音もいよいよ快調に、陸地と平行し波を蹴り舞鶴港に向かって航行中である。

祖国舞鶴に入港

午前九時頃と記憶しているが、遠州丸は速力を

落とし波静かな舞鶴港にゆつくりと滑り込んだ。船着き場の棧橋が遠望され、湾内の左手に懸崖の松の緑が見え、段々畑に日章旗や手を振る親子連れの姿、若竹色の鮮やかな竹林、その背景に白雲悠悠として青空に流れる風景などが眼に飛び込み「なんと日本は美しい国であろう」と感動する声が甲板に渦巻いた。

何年か夢に見た懐かしい祖国、国破れて山河あり、我が祖国の山河は昔日のままに美しく着飾り、私達を待っている。押さえても押さえても心の底から沸き上がる、果てしない感動の波を覚えた。

間もなく遠州丸にタラップが降ろされ、二泊三日お世話になった船員並びに援護局関係者にお礼を申し上げ、小型連絡船に乗り換え上陸用の棧橋に向かった。

その瞬間、遙か彼方の船着き場より、ポリウームをいっぱい上げたスピーカーからメロディーが流れ、私達二千人の復員者を歓迎してくれた。

今流れているメロディーについて船員に尋ねたところ、「異国の丘」という歌謡曲で、NHKの「素人のど自慢」で、酷寒のシベリアより復員してきた一人の元兵士が歌ったのがきっかけとなり、歌詞、メロディーともに人々の共感を呼び、たちまち全国に広がった。酷寒の地シベリアにおいて抑留生活を送る夫や息子を偲びながら、老いも若きも多くの人に歌われていると説明してくれた。

あれから五十余年の歳月が経過したが、船上にて「異国の丘」について経緯を説明いただいた船員に感謝するとともに、今も頭に深く刻み込まれている。

異国の丘

一、今日もくれゆく 異国の丘に

友よ辛かる 切なかる

我慢だ待ってろ 嵐が過ぎりゃ

帰る日も来る 春が来る

二、今日も更けゆく 異国の丘に

夢も寒かろ 冷たかろ

泣いて笑って 歌って耐えりゃ

望む日が来る 朝が来る

三、今日も昨日も 異国の丘に

おもい雪空 陽が薄い

倒れちゃならない 祖国の土に

辿りつくまで その日まで

シベリア抑留生活の実態は右記「異国の丘」の
歌詞の通りであり、空を眺め白鳥が南へ向かって
飛んで行く姿を見て、鳥になりたいと何回か思っ
たことがある。

また夜空を見て、この北斗七星も祖国で親兄弟
が同じ星空を眺めているだろうと思つたのは、抑
留者として私だけでなく全員そう思つたことであ
らう。

戦後五十余年が経過したが「異国の丘」は抑留
体験者のみが味わつた一生忘れれることのできな

い苦しい味であった。

昭和三十一年十二月二十六日、ソ連ナホトカ港
より引揚船（興安丸）が千二十五人の最後の復員
兵を乗せて舞鶴港に入港し、「涙のシベリア物語」
は静かに幕を閉じた。

帰還

一、帰還の連絡

昭和二十三年七月下旬頃
第五〇三ケメルボ収容所

二、帰還集結地

ナホトカ港

三、帰還船

遠州丸（貨物船）

四、船内生活

平穩無事

五、舞鶴入港

昭和二十三年八月十二日
午前十時頃

帰国後の生活

東京電力株式会社に職中に現役として入隊し、
兵役及び終戦後のシベリア抑留期間中は休職の扱
いがなされていた。

休職期間中の給与取扱いは在職者同様の扱いにて、勤続年数も加算され、復職時には一カ月の静養休暇と慰労金が付与された。

【執筆者の紹介】

引揚時の本籍 栃木県下都賀郡小山町大字

本籍 栃木県小山市中央町

現住所 栃木県小山市中央町

生年月日 大正十三年四月十八日

出身校 昭和十六年十二月 小山高等学校卒業

就職先 昭和五十六年

東京電力株式会社栃木支店定年退職

入隊日 昭和十九年十一月二十日

宇都宮東部三十六部隊

教育隊 中国河北省高揚

第六十三師団二九九三部隊機関銃中隊

転属 昭和二十年六月

北支派遣軍より関東軍の隷下となる

終戦時 満州国錦州市

入所期日及び地名 昭和二十年十二月二日

ケメルボ、ノボシビルスク

労働 建築関係

引揚時 昭和二十三年七月下旬頃

ケメルボ収容所

帰還 昭和二十三年八月十二日

帰還後 ナホトカ港より遠州丸で舞鶴港へ上陸
東京電力株式会社にて休職扱いがなされ、復員とともに約四カ年間の諸待遇を受け、在職者同様であり感激したそ

うである

家族 夫婦二人暮らし

子供二人、孫五人とは別居生活

(栃木県 野沢 芳夫)